

早嶋 聡史の 世の中を 視座る Let's SIZZERL

企業の戦略コンサルティングを行う早嶋 聡史が、近年のマクロ環境の変化をもとに、歯科医院経営者としての視座や視点を少し大きな立ち位置からお伝えします。

歯科医院の患者さんが、来院する前に自院のホームページの何処を読んでいたのかがわかる。その記録をもとにお話をする。治療している患者さんの症状に疑問があり、全てのデータベースにアクセスをして同様の症状を持つデータから医師の判断を助けてくれる。開業間もない歯科医院の先生が自費の値段をつける時に考えあぐねている時、同様の条件で開業したドクターがどのような価格設定をして、どの価格帯をつけたドクターの経営成績が良いのかが瞬時にわかる。

これまで個人の頭の中にあったデータが、コンピュータの出現によって0と1のコードに置き換えられました。そしてそのコンピュータ同士がネットワークを通じてコミュニケーションを取るようになり、やがて膨大なデータから最も効率の良いやり方や、将来の予測など様々な分野に応用することが可能になりました。

この動きは始まったばかりですが、データを制した企業や組織や個人は、土地や鉄をおさえた時代のように、今後世の中のビジネスを制していくかもしれません。この動きは規制や様々な法的な動きがあるにせよ、医療の世界、そして歯科医院の世界にもやってくるかもしれません。

日本企業は1970年代に自動車産業で経済発展を遂げ、1980年代に入り世界の家電業界を新しく切り開きました。そして昨今、経済の成熟化と少子高齢化に対応すべく新しくロボット産業が注目されています。そしてこの動きは日本の経済発展の柱としても重要な立ち位置になるでしょう。

データ化する社会 01

Q

農業の時代は土地をおさえた人や組織が権力を握っています。産業の時代は鉄をおさえた人や組織が権力を握りました。さて、昨今は何をおさえた人が権力を握るのでしょうか？

A

答えは「データ」です。

そもそも日本がロボティクスに頼らざるを得ない背景は上述したように生産年齢人口の大減少にあります。昨今から今後に向けて、世界が経験したことのない人口構造に変化していくからです。

当然、これらに対しての打ち手を考えなければなりません。そして通常考えられる方向性は3つしかありません。1つは、内部の人口そのものを増やすこと、2つ目は外部の労働人口を活用すること、そして3つ目は、人間以外の手を活用することです。

1つ目のオプションを検討します。仮に、今この瞬間に内部の人口を増加させることが出来て100万人の子どもを誕生させたとしましょう。それでもその子どもが労働人口として活躍できるまでに少なくとも16年の月日が必要になります。そう考えたらこのオプションは時間の余裕が必要です。



2つ目のオプションです。日本は基本的に閉鎖的な労働政策を取っています。一部の有識者や国益にプラスになる方々は別扱いで対応しているとしても、圧倒的な労働資本となり得る外国人労働者に対しての政策は正面切って議論されていません。仮に、今この瞬間に外国人の受け入れや移民政策がスタートしたとしても、他国の事例を参照すると安定的な労働力を確保するまでに仕組みが整うのに15年から20年の月日を要しています。

従って3つ目のオプションをすすめるしかないのです。これがロボットを活用せざるを得ないインセンティブになっており、もともと技術大国としての強みを発揮していくキッカケになっています。様々な有識者の考えを総合すると2020年頃までにはロボットは1つの輸出産業としても重要な役割を示していることでしょう。

現在のロボット産業のビッグ5は日本、中国、アメリカ、韓国、ドイツです。この内、日本とアメリカは高度な産業ロボットや医療ロボットの分野に明るく、韓国と中国は一般消費者に近い比較的安価なロボットの主要産出国です。日本がロボット出荷台数を増加させている一方で、中国は2005年以降、年率25%もの勢いでロボット市場が成長しており業界としての勢いも注目に値します。

この方向性が示す将来は明確でしょう。ロボットは徐々に人が行っていた仕事を代替するようになるのです。既に実現しているような単純な仕事は労働力不足のインセンティブから既にロボットに置き換わっています。しかし高度な作業もロボットにとってはへっちゃらで、むしろ正確にこなすということではロボットの方が優位に働く世界もあるでしょう。

たとえば医療の世界でもしかりです。2013年、1300台のロボットが平均150万ドルで販売されていました。当時、高度な医療サービスを提供しなければならない治療の6%相当をロボットが手がけていました。100万人以上のアメリカ人がロボットによる手術を受けていたのです。

ロボットの応用分野は、心臓弁の機能改善のような高度な手術支援から大腸内視鏡検査を受ける患者の鎮静を自動で行うような処置など実際に実現している範囲は様々です。

このようなロボットの活躍はほんの10年前までは殆ど予測がありませんでした。そして単に人間の仕事をロボットに置き換えるだけでなく、これまで人間が想像もつかないようなことが現実出来るようになってきています。

ロボットは互いにネットワークでつながり、最も効率のよいやり方を自ら学習していきます。これまで人間の頭の中だけに蓄積していた手術のデータや処置のデータが瞬時にネットワーク上のデータベースに蓄積し、様々な事例に分類され他のロボット間同士で完全に共有されます。

機械で制御されるロボットは、そのデータをもとに初めての処置であってもベテランロボットが蓄積したデータをベースに完全にパーフェクトな処置を提供することも可能になるでしょう。

2000年頃まではロボットは個別の動きをしていました。それが2007年頃を境に互いにネットワークでつながり、それぞれが経験し、学習したデータを互いに共有して瞬時に活用出来る仕組みが出来てきました。

冒頭で質問した答えがココにあります。近年のIT化やネットワーク化の中で、最も重要な位置を占めるものがデータになるのです。ビッグデータという言葉がITエンジニアの世界から経営の世界に広く普及して一般的になりました。人や社会の動きが数値化され完全にデジタルで処理できる時代が到来するのです。



はやしま さとし
早嶋 聡史 = 文

株式会社ビズ・ナビ & カンパニー 代表取締役、一般財団法人 日本 M&A アドバイザー協会理事、シザールの未来社長塾 塾長。オーストラリア・ボンド大学大学院 経営学修士課程修了 (MBA)、ドラッカー学会会員。



書籍
ドラッカーが教える
実践マーケティング戦略
(総合法令出版社)



書籍
頭のモヤモヤを
スッキリさせる
思考術
(総合法令出版社)